

文学的に読む 悪という存在

対談

島田雅彦
(作家)

野崎 歓
(フランス文学者)

小説や映画では作品ごとに、現実世界では政治の局面ごとに悪という存在が登場する。それはなぜか？ すべての物語が悪を求めているせいなのか？ 読み、観、そして生きる我々が悪を求めているせいなのか？ 「文学性」をキーワードに二人の泰斗が悪について語り尽くす。



写真① トッド・フィリップス監督の映画『ジョーカー』(2019年)は悪の誕生の物語をホアキン・フェニックスが演じた。
©Capital Pictures/amanaimages

野崎 今日の話のテーマは「文学における悪」ということですが、ぼくは昨年、映画『ジョーカー』(写真①)を観たときの興奮がまだに覚めなくて。そこから話を始めたんだけど、島田さんは観ましたか？

島田 残念ながら劇場では観ていないんですが、野崎さんの興奮は、なんとなく想像がつかますよ。というのは、劇場公開の映画に限らず、た

とえばネットフリックスやアマゾン・プライムのようにインターネット・メディアで有料配信されているものも含めて、最近の映像作品は特にシナリオの文学的レベルが高くなってきているからです。おそらく、これは世界的な傾向だろうけど、特に米国では紙媒体の文学で食っていくのは難しくなってきたので、多くの文学的才能が映像の分野に流入しているんだと思います。だから「文学における悪」というテーマで映画から話を始めるのは、むしろ時代にマッチしているし、そもそも今回の特集も『otoda』の編集会議で『ジョーカー』を観た編集者たちが盛り上がりつつ実現したそうだから(笑)。

ジョーカーというのは、クリストファー・ノーラン監督の映画『バットマン』シリーズに出てくる悪役ですか？

野崎 そうです。いま言われたノーラン監督の三部作にも登場する稀代の悪役がいかんにして誕生したかを描いたスピン・オフ的な作品です。

島田 なるほど。悪が、しかるべくして誕生するという物語——その背景に醜い容姿も含めて身体的なハンディキャップがあったり、不幸な生い立ちがあったり——というのは、文学の世界ではどこらへんに原型があるのかな。パットと思えば浮かぶのはシェイクスピアの『リチャード

三世』でしょうか。

野崎 作品のなかでリチャード三世は身体的ハンディキャップを持ち、それをバネにして狡猾さと残忍さを武器に権力への執念を燃やす人物として描かれていますね。

島田 そう。やはり、そういった背景があつて、悪は生まれるべくして生まれたというか、復讐の権利を認めて物語のなかで悪に必然性を持たせるのが「文学における悪」の存在意義なんじゃないかな。

『ジョーカー』は残酷演劇、 そして三島由紀夫

野崎 それにしても、島田さんはまだ『ジョーカー』を観ていないんですね!? なんで、そんなに的確な解説ができるの? ぼくは、今日の対談に備えてノーラン監督の『バットマン』三部作、いわゆる「ダークナイト・トリロジー」を改めて一気に観ただけで、そこでのジョーカーは余計な説明もなく純粋な悪そのものという感じ。その他の悪役たちが皆、強烈で、ぼくのような軟弱な人間はその悪のインパクトに気圧されて体調を崩したぐらいなんです。『ジョーカー』には映画のシナリオで言うところのバツ

ク・ストーリーというか、悪の誕生の過程が掘り下げられている。こちらはぼくと文学的な描き方というか、実存主義的で、ぼくが感銘を受けたポイントなんです。

ジョーカーは母親と二人で、質素かつ平凡に暮らしているんだけど、そこで彼はしばしば瘻癩的な笑いを発するんです。これが延々と続く不気味だし、不快でもある。しかし、この笑いが作品全体を通して非常に効いている。ジョーカーの「瘻癩」が、観客をいわば金縛り状態にして悪が善から分離していく、その根源への部分へと力づくで引きずり込んでいくんです。

島田 その笑いというのは、悪が復讐を果たして、つまり自己実現を完遂して、最後に上げる高笑いにも通じていくんですね。

野崎 三島由紀夫さんの高笑いというのは伝説になつていますよね。ジョーカーの笑いは「ダークナイト・トリロジー」では、ある意味、三島さんの笑いだと思えます。

島田 三島さんには会ったことがないので伝聞にすぎませんが、あの高笑いもやはり、ボディビルにのめり込まずにはいられなかった彼の身体的なものであったり、そういったコンプレックスの裏返しだったんじゃないかな。

野崎 その笑いが『ジョーカー』では超人的な